

第5章 戦後の東京油問屋の歩み

東京油問屋市場の復活

戦後の東京油問屋市場の歴史は、統制撤廃が秒読み段階に入った昭和24年2月2日に開かれた理事会の新組合員募集についての話し合いから始まった。戦後の混乱期の中で、都内販売業者の興亡は著しく、組合員の中にも営業を継続できないところがある一方で、新たに油脂の卸業者としてスタートしたところも多い。こういった変化について協議した結果、営業を停止している組合員については当分そのままとし、新規の卸業者で入会を希望する者については入会金を1万円にすることを決めた。入会希望者は多く、3月に新入会員31名の加盟を認め披露会を行った。

翌25年10月3日、油脂統制撤廃を受けて東京油問屋市場を復活することを決め、かつ戦後に商売を始めた業者の加入も積極的に受け入れることとし、東京の業界に呼びかけたところ申込者が殺到した。2名以上の推薦人を条件として付け、希望者の選考を行い、第一次として38名の入会を認めた。

11月に第二次選考を行い、残った15名の入会希望者のうち5名の入会を決定し、従来からの組合員と合わせて、総勢135名となった。

昭和26年1月17日に復活第1回の起業祭を行い、125名の市場営業人が参加した。製油メーカー各位にも参加を求めたところ多数の参加が得られた。

戦後、油問屋を開業した有力な店として、三和油店や富田産業がある。飯島録三郎商店に勤めていた鈴木喜代治、鈴木直枝、藤本高司の3人が昭和22年に独立し、三和油店を開業した。昭和産業の特約店として成長、喜代治の後を継いだ鈴木公雄氏は平成2年から2年間、油問屋市場の理事長を努めている。

富田産業は、昭和22年に富田和三郎が港区新橋で富田商店を開業したのが始まり。スタートは個人商店だったが昭和24年に法人に変更し、昭和37年に富田産業に名称変更した。

第1回「東京油まつり」を開催

油脂の統制撤廃から、販売業界は食用油の消費増進を図るために積極的な活動を開始した。その皮切りとなったのが「東京油まつり」である。東京油まつり実行委員会（白石長三郎委員長）が主催し、農林省、食糧庁、東京都、油脂製造業会の後援を受けて昭和26年6月20日から7月20日の1ヵ月間にわたり、都内49カ所において街頭宣伝を実施し、この行事には5,000軒を超える小売販売店も協力・参加した。賞金や賞品にも思い切ったお金をかけ、総経費は543万1,015円にも達した。第1回東京油まつりの最後を飾ったのが、8月10日に日比谷公会堂で行われた“東京油まつり抽選会”。特等10万円、1等5,000円、2等2,000円、3等特選ゆかた1反、4等天ぷら油800g入り1缶、5等日劇招待券という内容の豪華賞金・賞品で多くの人が詰めかけたため、入場整理券が配られた。当日のプログラムとしては、ショー、漫才、落語、歌謡曲とバラエティーに富んだ催し物が準備され、抽選会は大いに盛り上がった。東京都知事（安井誠一郎氏）も来賓として挨拶した。

第1回東京油まつりが大成功に終わったことから、翌27年3月28日に春の油



▲大成功した第1回の“東京油まつり”



▲東京油まつりポスター



▲油まつりは日劇招待が恒例に

まつりを実施することとした。この年は「春の油まつり日劇招待会」とし、日本劇場を借り切って映画「お軽勘平」や日劇春の踊り等のショーを行った。当日は6,000名以上を招待したが、朝の8時にはすでに4,000人が日劇を取り巻き、開館以来の大入り満員となった。

昭和29年に企画した春の油まつりと写真コンクールは、全国写真材料協同組合とのタイアップで行ったもので、「油まつり、写真コンクール」の“のれん”を全国のカメラ店の軒先におら下げて大きな反響を呼んだ。

全国油脂販売業者連合会（全油販連）の設立

戦前は統制組合として全国の卸業を組織した「全国油脂販売業者連盟」（会長・館野栄吉）が設立されたが、戦後は各地区ごとの組合が独自の活動を行っていた。しかし、昭和25年の油脂統制撤廃、朝鮮戦争後の“新三品暴落”により油脂業界は大混乱に陥り、多くのメーカー、販売業者が倒産に追い込まれることとなった。また食用油価格の暴騰やメーカーの出荷規制などによる取扱数量の激減といった、油脂販売業全体の死活問題がクローズアップされるに及んで、全国組織の必要性が叫ばれるようになった。東京油問屋市場では、油脂販売業者の大同団結を大阪、名古屋をはじめとして全国の卸業界に呼びかけることとした。そして昭和27年12月から全国の業者に対する遊説を展開し、参加を募った。全国の油脂販売業者の賛同が得られたことにより、昭和28年3月2日、東京油問屋市場の会議室において創立総会を開催することができた。

初代会長には㈱館野栄吉商店の館野栄吉社長、副会長には飯島録三郎と木村

治朗が選ばれた。全油販連の運営費は東京と大阪が中心に負担し、各府県で組織のある団体にも若干の負担をしてもらうことになった。愛知県油脂卸協同組合（太田進造理事長）は28年10月1日に設立され全油販連に参加した。

関西油脂協議会の設立

全国油脂販売業者連合会設立の気運が高まるとともに、関西でも地域の油問屋の組合設立に向けての動きが着々と進んでいた。昭和28年3月2日に開かれた全油販連の設立総会には、関西の油脂業界から木村商店、近畿油業、大阪油脂、長谷川商店の4社が出席していたが、東京油問屋と車の両輪となるべき団体の設立は遅れていた。全油販連の常務理事1名、理事4名が関西の卸団体から出すことが決まっていたこともあり、昭和28年3月18日に至り、「関西油脂協議会」の設立総会が開かれることとなった。設立総会は大阪の油糧俱樂部において開催され、16社が出席した。会長には木村商店の木村治朗が選ばれた。協議会事務所は木村商店内に設置することとされた。

マルキチ（旧木村商店）はイケハン（池田屋半兵衛）と並び伝統ある関西でももっとも古い油問屋で、創業は元禄2（1689）年にまで遡り、丸屋吉兵衛が薬種、油脂、木蠟問屋を始めたもの。今日も木村治愛が関西油脂販売業界の重鎮である。

消防法改正の推進運動

昭和30年12月、動植物油類を消防法上の危険物指定から外してもらうための運動を進めるため、市場内に「危険物対策委員会」を設置した。油問屋市場の呼びかけに多くの関連業界が呼応し、翌31年1月16日に市場の会議室に13団体が集まり指定除外の運動推進に向けて協議を行った。そして32年1月15日、日本橋公会堂ホールにおいて全国油脂関係業者大会を開催し、「企業の合理化を阻む消防法第二条六項別表危険物より動植物油類を削除する法律改正の即時実現を期す」との大会決議文を採択した。これらの運動が実り、消防法の改正が成立したのは昭和34年3月のことで、危険物に当たる動植物油類について、「動植物油類とは不燃性容器に収納密栓され貯蔵保管中以外のものをいう」と新たな定義が行われた。

油脂週間と油の日

農林省に設置された油脂消費増進部会は、9月1日からの1週間を「油脂週間」とすることを決め、昭和27年から実施された。さらに昭和31年9月から、「毎月一日油の日」とすることが決められ、9月1日には産経会館国際ホールにおいて「毎月一日油の日」の集いが行われた。この年の油脂週間にはさまざまなイベントが企画され、中でも話題を呼んだのがオペラ歌手の田谷力三とのタイアップによる“花馬車の行進”。産経ホールで行われていた田谷力三一座のオペラ“ボッカチヨ”と油脂週間の看板を立て、オペラに出演する美人歌手が馬車に乗り込んで、オペラと油脂の宣伝を行った。報道機関も殺到し、大き



▲田谷力三のオペラとタイアップした“花馬車の行進”



▲店頭に貼られたポスター



▲のれんも揚げられた

なニュースとなった。

また業界でも油脂販売業者、メーカー、油脂輸送各社などが協力してトラック、小型自動車、オート三輪車などに「毎月一日油の日」のステッカーを貼った。都道府県では県庁舎屋上に「毎月一日油の日」という看板を掲げるところもあり、油の日を広めるための全国的な運動が展開された。

油脂販売業界では、紺地に白で「毎月一日油の日」と染め抜いた暖簾と幟を作り、油脂販売店、天ぷら屋などで掲げてもらうなど、積極的な取り組みを行った。

油脂小売商協組の設立と解散

団体組織法の制定に伴い、油脂小売店の組織化を働きかけたところ、設立同意者が700名以上となり、昭和32年4月18日、東京都油脂小売商業協同組合の創立総会を開催した。初代理事長には油問屋市場の営業人である大森良三が選ばれた。モータリゼーションの到来により油脂小売商業協同組合といっても食用油だけではなく、ガソリンや灯油の販売も行っており、当時頻発した灯油とガソリンの誤販を防ぐため、ガソリン札を赤色、白ヌキで作成し、ガソリンや揮発油を販売したときは必ず容器に取り付け、誤りのないようにした。

しかし、スーパーの台頭により食用油はスーパーの安売りに勝てず、廃業するところが相次ぎ、食用油の取り扱いを中止するところも多く出たため、東京都油脂小売商業協同組合は昭和50年に事業を休止し、昭和59年12月21日に東京シティエアターミナルにおいて解散総会を開き、正式に解散することとなった。

経営の多角化と商品展示会

昭和34年4月20日より29日までの10日間にわたり、東京都油脂小売商業協同組合との共催により「取扱商品展示会」を開催した。油脂販売業界の体質改善と多角化経営、店舗改造、陳列のヒントを与えるために開催されたこの展示会には、東京だけでなく埼玉、神奈川、千葉、静岡、山梨などの各県か



▲多角化を目指した展示会

ら多くの販売店が詰めかけ、期間中の入場者は1,500名以上に達した。油問屋の経営多角化を目指した取り組みはこの後も続けられる。

昭和38年には、東京油問屋市場内に「油問屋経営多角化委員会」を設置し、油問屋の経営改善に資することとした。油問屋は明治時代にランプの普及とともに油脂から石油へと灯火の原料が変わったのに対応し、多くが菜種油とともに石油も扱うようになった。その伝統でガソリンスタンドや暖房用灯油販売などへの進出は行われていたが、一方、本業である食用油販売が食品系総合問屋に脅かされる状況が、昭和36年の自由化以降は特に目立つようになってきたため、油市場が積極的にこの問題に取り組んだ。

“開所参百年祭” を開催

昭和35年3月25日に東京油問屋市場（島田増次郎理事長）は開所300周年、創立60周年を記念して台東区立室内体育館において式典と運動会を開催するとともに、記念誌「油の歴史」を刊行した。式典では、福田赴夫農林大臣や東（あづま）東京都知事の祝辞を頂くとともに、オ



▲台東区立室内体育館で行われた記念式典
リンピック選手の模範演技、270名以上の永年勤続社員の表彰などが行われた。この開所参百年祭には、メーカー、販売店などを含めて約4,000人が集まるなど盛況を極めた。

賛助会員制度と食工部会の発足

昭和36年、油市場の財政面の安定を図るため製油メーカーを対象に賛助会員制度を設けることとした。59社という多くのメーカーの協賛が得られたことで、賛助会員制度はスムーズに発足することができた。これにより財政面での安定を得られたことで、懇親団体に止まるのではなく団体として積極的な活動を行う計画が具体化し、食用油部会、工業油部会をそれぞれ発足させた。両部会には営業人から比較的取り扱い量の多い問屋の参加を求めることとなったが、最

終的に食用油部会には46名の参加が得られた。昭和37年1月29日に、東京商工会議所においてメーカーの賛助会員と食用油・工業油部会員による意見交換と懇親パーティーが行われた。賛助会員34名、部会員34名が出席し、当面の業界の諸問題について熱心な話し合いが行われた。

日本油脂協会の設立

昭和37年1月25日、(社)日本油脂協会が設立された。製油メーカーの団体としては油脂製造業会があったが、昭和36年5月にトップメーカーであった豊年製油が脱会し、片肺飛行を余儀なくされた。また中小の菜種搾油メーカーは別途、日本油糧工業協同組合連合会を設立していた。しかし輸入大豆・菜種や植物油粕の自由化を控え、業界を代表する団体の1本化は、意見の集約する上でも必要であった。また行政にとっても大手の主要メーカーを網羅した団体の必要性は増していることもあって、時の農林大臣河野一郎は昭和36年8月、製油大手10社の首脳を農林省に招き、製油業界の大同団結を促した。その後紆余曲折があり、発起人会が3回、設立準備委員会は7回にわたって開かれるなど懸命の調整が図られた結果、昭和37年1月25日に東京会館において(社)日本油脂協会(後に日本植物油協会)の創立総会が開催された。初代会長には発起人代表の坂口幸雄日清製油社長が就任した。会長は1年輪番制とされ、日清製油、味の素、豊年製油、昭和産業の代表者が1年交替で会長に就任することが決められた。

復活した“油まつり”



▲施設の子供たちにドーナツのプレゼント

昭和26年に第1回が行われて好評を博した“油まつり”は、その後も行われたが準備に大変なエネルギーを要することから、次第に間隔が開くこととなった。しかし、昭和37年に米国（日米大豆調査会）の協力を得て大豆油販売促進運動に取り組んだことから、“油まつり”の復活気運が盛り上がり、油問屋市場は東京都油脂小売商業協同組合と共同で、昭和38年10月15日から11月5日までの期間で装い新たに実施することとした。ことにマスコミの注目を浴びたのは、老人ホームや施設の子供たちへのドーナツのプレゼント。11月4日から9日までの6日間、児童施設38、老人ホーム16を訪れ目の前でドーナツを揚げ、次々と手渡して喜ばれた。また“油まつり”の一環として、「小・中学生の油に関する綴り方」の募集を行い、優秀作品の表彰式を12月3日に東京商工会議所において行った。

第1回製販懇談会を開催

昭和42年（河合誠一郎理事長）より定期的に製販懇談会を開催することとし、その第1回会合を2月23日に新橋の第一ホテル別館において開いた。賛助会員（メーカー）から44名、市場営業人43名、報道関係6名の合計93名が出席した。第一部を懇談会、第二部を懇親会とし意思の疎通を密にした。

東京油問屋市場ニュース第1号発行

金田勝次理事長の就任を受けて、昭和44年8月1日付けで「東京油問屋市場ニュース」が創刊された。市場の行事を記録として残すこと、市場営業人の情報を広く伝えること、建値を掲載することなどを目的とし、ほぼ2カ月に1回のペースで発刊された。投稿も積極的に行われ、昭和45年7月30日付けの第9号では、T. Y生の名前で「油問屋が配送センターを持って、共同倉庫と共同配達に踏み切らない限り、何時とはなしに自然と小口得意先を手放していく運命にあるのではなかろうか」といった提案もなされている。

その後東京油問屋市場ニュースは昭和48年6月1日付けまで発行され、通し番号で21号が最後となった。昭和46年11月から「全油販連ニュース」が発刊されており、いずれも遠山智秋（平成3年5月まで東京油問屋市場事務局長）編集によるもので、同時に2つのニュースを出し続けるのは物理的に無理であった。「東京油問屋市場ニュース」は、「全油販連ニュース」に発展解消したとい

うことである。全油販連ニュースは、一時中断はあるもののその後も継続して発刊されている。

（株）油商会館の設立

昭和44年から45年にかけての大きな事業として（株）油商会館の設立がある。東京油問屋市場の建物が耐用年数を過ぎ老朽化してきたことと、地主から昭和43年頃から借地契約の更改を迫られたこともあり、役員会での協議を重ね、また臨時総会を経て、敷地を買い取ることを決めた。そのため新たに株式会社を設立することとし、昭和45年7月21日に第1回の設立発起人会を開催した。この場で、新会社の名称を「株式会社油商会館」とすることが決まり、株式募集の分担などについても決定した。（株）油商会館の株式は4万株が募集され、油問屋市場の営業人のほとんどが募集に応じ、2,000万円の資本金の払い込みが9月19日までに滞りなく完了した。

そして、昭和45年9月28日に鉄鋼会館において（株）油商会館設立総会が開かれ、初代社長に金田勝次東京油問屋理事長が選ばれた。油商会館の設立によって東京油問屋市場の財政基盤も確立することとなった。

旧ビルは9月に取り壊され、新会館建設の地鎮祭が昭和48年11月2日に行わ



▲会館建設を推進した金田名誉会長



▲念願の“油商会館”が完成

れた。新会館建設中の約1年間は、近くにある浜町の日本マーガリン工業会会館に間借りすることとなった。新会館は昭和49年8月に完成し、8月8日に事務所が移転した。油商会館の落成式と披露パーティは8月20日に行い、多くの参会者が集まった。

ニクソンショックで製販懇談会

昭和46年8月16日に発表されたニクソン米大統領の金との兌換を停止するドル防衛策は、いわゆるニクソンショックとして我が国経済に大きな影響を与えた。このため、油市場理事会（金田勝次理事長）は日本油脂協会に対して、メーカーサイドの今後の対策と方針について考え方を聞くための製販懇談会の開催を申し入れた。第1回懇談会はニクソンショック冷めやらぬ8月26日に経団連会館において開催され、鈴木重明日油協会長以下各社のトップが出席し、生産過剰にならないよう、また油価を適正に引き上げるよう努力する旨が語られた。その後年末まで8回にわたって製販懇談会が開かれ、この年の事跡報告書では「製販懇談会が本当に腹を割った話し合いが出来たのは、これが始めてであり、且つこのように長期にわたって行われたことも、昭和25年当市場再開以来油脂業界にとって初めての出来事でありました」と述べられている。

ただ、続けて「10月以降は再び油価がくずれて果てしない泥沼に入り込んだことは、返すがえすも残念なことであります」とされており、油脂業界の競争体質の根強さを感じさせた1年でもあった。

また、翌47年5月23日から京都で開催された世界製油業者大会には、多数が油脂販売業者から参加し、製販協調の実を挙げる事ができた。

ごま油メーカーとの懇談会開催

昭和54年9月11日、油商会館においてごま油メーカーとの懇談会を開催した。大豆油を生産する大手メーカーとの製販懇談会は、頻繁に実施してきたが、胡麻油メーカーとの改まった懇談会はこれまで1度も行ったことがなかった。胡麻油は荏胡麻油と並び、わが国でもっとも古くから使われてきた植物油であり、歴史のある搾油メーカーが多く、わが国の植物油の歴史を具現化している観がある。大豆白絞油のように安売りもほとんどなく、製販の関係がもっともスムーズに運んでいた業界でもある。ところが、世界中で健康に良い胡麻油が

見直され、産地の原料価格が上がるなど変化が見え始めたため、油問屋としても各種の情報を知る必要度が高くなったことで、懇談会が開かれた。

創立80周年記念式典を実施

東京油問屋市場（菱沼由三郎理事長）は昭和55年に創立80周年を迎えたことで、同年3月25日に新橋の第一ホテルにおいて記念式典を開催した。

農林水産省食品流通局長より市場に感謝状が授与された。また油ゆかりの住吉神社、油祖離宮八幡宮、油日神社にそれぞれ記念品と金一封が贈られた。

崇敬会を設立

油祖離宮八幡宮は独自に開発した搾油道具「長木」により荏胡麻を搾り、全国の油生産を独占したが、菜種搾油の始まりとともにその勢いは衰え、江戸時代には搾油も停止した。油の販売による事業収入が莫大であっただけに、神社としての財政的基盤は弱く、事業収入が途絶えて以降、離宮八幡宮は改修もままならないような状況となっていた。こういった離宮八幡宮の窮状を見て、東京油問屋市場の金田勝次氏が中心になって新たに「崇敬会」の発足を働きかけることとし、昭和61年に「油祖離宮八幡宮崇敬会趣意書」（発起人代表・坂口幸雄日清製油㈱会長）を全国の製油メーカー、油脂販売業をはじめとした油脂関係者に配付し、崇敬会への参加を募った。趣意書の発送先は1,300社に達した。崇敬会発足により神事“日使頭祭”は復活することとなり、昭和62年4月3日に、坂口幸雄崇敬会会長が“日の頭油長者”に就任した。今日でも毎年4月3日に全国から油脂関係者が集まり、古式に則った儀式が行われている。

米寿祭を迎えた油問屋市場

東京油問屋市場は昭和63年に創立88周年を迎え、3月24日に米寿祭を全油販連創立35周年式典と同時に上野精養軒において開催した。当日は記念講演に続く、式典において喜寿以上の営業人に記念品が贈呈された。また、「米寿祭～万治から昭和まで風雪の歩み」と題する小冊子をまとめて、関係者に配付した。この小冊子には、江戸時代の組合に始まり問屋から、明治に入ってから東京油問屋市場の創設からその後の変遷について書かれており、開所300周年の記

念誌「あぶらの歴史」（昭和35年刊）とはまた違った意味で貴重な文献となっている。

パーム油とオリーブ油を新規上場

平成5年1月から、パーム油とオリーブ油が新規に上場することになった。パーム油の斗缶が増え、オリーブ油もイタリア料理、ワインブームもあってレストランなどでの消費が伸びていることから、平成4年10月14日の役員会において決定した。これに先立って建値委員会では、立会いの後で製油メーカーから研究員を招き、パーム油の勉強会も実施した。

カナダ視察・研修旅行を実施

平成9年7月20日から27日までの8日間にわたり、東京油問屋市場主催、全国油脂販売業者連合会の共催によるカナダ視察・研修旅行が行われた。油市場関係10名、地方会員4名、製油メーカー7名の総勢21名が参加した。この視察・研修旅行の目的は、遺伝子組換え菜種の安全性について、実際に目で見て、また直接関係者の話を聞いて確認することにあつた。キャンブラフーズ（食用油搾油・精製・加工メーカー）、ゼネカシーズ社、アグレボ社（種子会社）のカノーラ生産普及展示圃場を訪ねて、バイオテクノロジーについての説明を受けた。



▲遺伝子組換え菜種の安全性確認のためカナダを視察

伝統ある油問屋市場の行事

東京油問屋市場の1年は“初立会”で始まる。業界団体が新年交礼会で新年の顔合わせを行うのに対して、油市場は油の値決めを行う立会（建値）でスタートする。建値委員の鳴らす威勢のよい撃拓の心地好い音が新年の幕開けを告げるのである。

新年に欠かせないもうひとつの行事が“初詣”だ。製販の幹部が会して毎年1月20日、佃島住吉神社に御参りする。式典の後、お神酒を頂き、その後の懇親会で製販の連携を確かめる。

“起業祭”は毎年3月25日に行っている。1901年に東京油問屋市場が創設されて以来、欠かさず行っており、2000年が100回目の大きな節目に当たる。

3月の起業祭から月を明けた4月、京都山崎の油祖離宮八幡宮で“日使頭祭”が開催され、製油メーカー各社の代表と多くの市場営業人が参加する。

団体としての定時総会は毎年6月に行われ、1年の事蹟報告、これからの1年の事業計画と予算が審議され、2年に1度は役員改選が行われる。

晦日の12月には“大納会”が恒例の行事になっている。初立会で始まった油問屋市場の行事は、大納会の立会いで1年を終える。

そしてこれら恒例の行事に欠かせないのが、“古式油メ”である。油問屋市場伝統の宴を締める手拍子で、12回手を打つ。最初は3回の手拍子を調子よく3度繰り返し、最後の3回はゆっくりと打つ。これは1年12カ月を現しているといわれ、また最後のゆっくりと3回打つのは、油をたたりたり注ぐのをイメージしているといわれる。この“古式油メ”，斎藤道三以来の手メで、売り方、買い方双方の値が決まり商が成立した時に、両者の繁栄を祈念して12回手を打ったと伝えられている。以前は建値が決まるごとに油メで締めたという。

翌年の見通しを話し合う“内気配”は年も押し詰まった12月末に行われる。この時建値委員会は1年を振り返り、また今後の油の動向を展望する。

これらの伝統行事以外に、日常的な活動として行われているのが理事会（役員会）と総務委員会（市場の運営を話し合う）、各種の伝統行事の企画と運営を行う企画委員会、月2回行われる立会を取り仕切る建値委員会、研修会の実施と問屋が抱える様々な問題について話し合う経営委員会などである。また製油工場への見学や、海外の原料視察も必要に応じて随時行っている。

年表 (東京油問屋市場設立後から100周年まで)

年度	東京油問屋市場関連の動き	油脂業界・政治・経済・社会の動き
明治14(1881)年	(2)問屋仲買油商組合設立	
18(1885)年	(9)大阪油商組合設立 (12)東京油商組合設立	- 伝染病流行死者多数発生
19(1886)年		
22(1889)年		(2)大日本帝国憲法発布 (5)摂津製油設立
25(1892)年	(1)東京油問屋組合設立	(3)岡村製油設立 - 米澤製油所(現米澤製油)設立
26(1893)年	(11)大阪油取引所設立	(1)商法改正(3)電話開通
27(1894)年		(8)日清戦争勃発
34(1901)年	(3)東京油問屋市場設立	
35(1902)年		- 盛産社(現太田油脂)設立
37(1904)年		(2)日露戦争勃発
40(1907)年		(3)日清豆粕製造(現日清製油)設立
42(1909)年		- 日本初の油出法の大豆搾油開始
大正3(1914)年	(7)大阪油取引所解散	(7)第一次世界大戦勃発
4(1915)年	- 大阪油商組合設立	
6(1917)年		(3)日華製油(現日華油脂)設立
11(1922)年		(4)豊年製油(現ホーネンコーポレーション)設立
12(1923)年		(9)関東大震災
14(1925)年		(12)味の素設立
昭和4(1929)年		(10)世界恐慌始まる
6(1931)年		(9)満州事変勃発
7(1934)年		(11)吉原製油設立
11(1936)年		(2)昭和産業設立
13(1938)年		(5)東京油脂工業設立
14(1939)年	(11)東京植物油卸商業組合設立	(9)第2次世界大戦勃発
16(1941)年	全国油脂販売業者連盟結成	(12)太平洋戦争勃発
19(1944)年	東京油脂卸統制組合に改組	
20(1945)年	東京油脂配給統制組合設立	(8)太平洋戦争終戦
21(1946)年		(2)三和油脂設立 (6)伊藤製油設立
22(1947)年	(5)東京都油脂商業協同組合設立	(5)日本国憲法施行 (10)東濱油脂工業(現 リノール油脂)設立 (12)房総油脂工業(現 ボーソー油脂)設立
23(1948)年		(3)日本糠油工業(現 ニッコー製油)設立
24(1949)年	山崎講復活	(4)1ドル360円の為替レート実施

年度	東京油問屋市場関連の動き	油脂業界・政治・経済・社会の動き
25(1950)年	全国油脂販売業者連盟解散	(6)朝鮮動乱勃発 (10)不二製油設立
26(1951)年	(1)東京油問屋市場の復活 (3)市場復活第1回起業祭開催 (6)東京油まつり(第1回)開催	(3)菜種を除く全油糧の統制解除 (4)新3品相場暴落 (9)対日講和条約調印
27(1952)年	小売標準価格表作成 (5)第1回春季クリエーション (8)農林省で油脂週間が実施 (12)市場・第1回講演会・懇談会開催	(5)IMF日本の加盟を承認 (7)日本油糧工業協同組合連合会設立 (11)植物油脂日本農林規格(JAS)制定 - 油脂市況暴落
28(1953)年	(2)市場・節分豆まき式実施(開始) (3)全国油脂販売業者連合会を設立 (6)油脂業界春季大運動会を実施 (8)取引改善推進協議会発足	(4)輸入大豆割当制が復活 - NHKテレビ本放映開始
29(1954)年	(3)全国油脂販売業者連合会第1回定時総会 (3)食生活改善調理講習会に協賛	(7)自衛隊発足 - 神武景気始まる
30(1955)年	(1~3)東京都主催食生活改善調理講習会 (3)動植物油類を危険物より削除する運動開始 (8)第1回メーカー販売店懇親野球大会	(5)全国米油工業協同組合設立 (6)関税および貿易に関する一般協定(ガット)に加盟
31(1956)年	(9)「毎月一日油の日」が実施	(12)日本が国連に加盟
32(1957)年	(4)東京都油脂小売商業協同組合設立 (9)食用油販売店の店頭標識設定 (9)油祖離宮八幡宮遷座1100年大祭挙行	(1)南極に昭和基地建設 (10)ソ連人工衛星打ち上げ成功 - なべ底景気
34(1959)年	(3)消防法一部改正(動植物油類を消防法上の危険物から削除) (4)油脂販売業界もメートル法実施 (4)第1回取扱商品展示会開催	(1)メートル法実施 (3)大蔵省貿易自由化方針 (4)皇太子結婚式 - 岩戸景気
35(1960)年	(3)開所参百年祭挙行 (7)「あぶらの歴史」発刊 (9)第1回製販油価安定対策委員会	(9)カラーテレビの本放送開始 (9)石油輸出国機構結成 (12)日米安保条約発効
36(1961)年	(2)「油問屋経済白書」作成 (10)第1回食工部会全員集会開催 - 賛助会員制度発足	(7)大豆自由化、関税10→13%に (6)農業基本法公布 (7)大豆自由化、関税10%から13%に
37(1962)年	(5)経営者講習会「労働講座開催」 (8)ASAと提携し「大豆油販売促進セールスマン講習会」開催	(1)社日本油脂協会設立 (2)東京世界初の1,000万人都市に - パーム油、ゴマ油等自由化
38(1963)年	(11)「油まつり」10年ぶりに実施	(11)ケネディ大統領暗殺
41(1966)年	(7)営業人の賦課金の口数制実施 (10)油脂販売業界訪米視察団派遣	(5)日本こめ油工業会設立 (8)日本大豆製油設立

年度	東京油問屋市場関連の動き	油脂業界・政治・経済・社会の動き
42(1967)年	(2)第1回製販懇談会開催 (4)「油の日」店頭標識・ポスター配付 (8)販売成績向上セールスマン講習会開催	(7)日本の人口1億人突破 (7)欧州共同体(EU)発足 (10)日油協製油産業の中間展望を発表
43(1968)年	(7)「生命傷害共済」実施 (9)油祖離宮八幡宮1110年祭開催	(1)サミット製油設立 (2)日本大豆製油操業開始 (10)カネミ油症事件発生
44(1969)年	(8)「東京油問屋市場ニュース」第1号発行	(1)米のアポロ11号月面着陸 (9)東洋製油千葉工場完成
45(1970)年	(3)創立70周年式典開催(上野精養軒) (9)株式会社油商会館設立	(3)EXPO'70を大阪で開催 (8)食品産業センター設立
46(1971)年	(2)第1回ボーリング大会実施	(8)米ニクソン大統領金とドルの交換停止(ドルショック)
47(1972)年	(5)世界製油業者大会(京都)に参加	(5)沖縄返還
48(1973)年	(11)油商会館建設工事地鎮祭	(2)円、変動相場制に移行 (6)米ニクソン大統領大豆の規制発表 (10)第一次石油ショック
49(1974)年	(8)油商会館ビル落成式とパーティー	(2)農林省、食用油価格安定で通達
54(1979)年	(1)企業経営研究会初会合 (9)第1回業務用食用油実態調査委員会開催	(2)第2次石油ショック (7)東京ラウンドの議定書調印
55(1980)年	(3)創立80周年式典祝典開催 (11)第1回相続税、資産管理セミナー開催	(1)米国、ソ連のフガン侵略で禁輸 (4)食用油の関税引き下げ実施 (8)ニッコー製油(株)設立
59(1984)年	(12)東京都油脂小売商業組合解散	(3)グリコ森永事件
60(1985)年	(9)経営委員会正式発足 (10)全国的規模による建値完成	(8)日航ジャンボ機墜落520人死亡 (9)プラザ合意で円高容認
63(1988)年	(3)米寿祭(創立88周年)開催 (6)昭和産業(株)鹿島事業所見学会	(3)瀬戸大橋開通 (9)世界油化学会が東京で開催
平成元(1989)年	(9)ホーネンコーポレーション清水工場見学会	(1)昭和天皇崩御、元号が平成に (4)税率3%の消費税実施
2(1990)年	(5)竹本油脂蒲郡工場見学会	(10)東西ドイツが統合
6(1994)年	(7)日清製油磯子工場見学会 (11)経営委員会主催第1回研修会開催	(5)日油協が毎月10日を植物油の日に (9)関西空港が開港
7(1995)年	(7)味の素川崎工場見学会	(3)地下鉄サリン事件、オウムノ犯行
9(1997)年	(7)カナダ視察・研修会を実施	(11)北海道拓殖銀行が経営破綻 (12)東食が経営破綻 - 遺伝子組換え作物が輸入
10(1998)年	(10)100周年記念事業委員会設置 (11)第70回国際搾油業協会世界大会(京都)に参加	(7)和歌山毒カレー事件 - カーギルが東食買収意向 - 製油メーカー各社のISO取得相次ぐ
12(2000)年	(3)創立100周年記念式典開催	(4)容器包装リサイクル法が完全施行

◆ 主な植物油脂とその特性 ◆

大豆油：大豆（油分18%）から抽出法で得られる半乾性油。脱脂大豆は家畜の蛋白原料として貴重。多価不飽和脂肪酸のリノール酸を50～57%含む。主産地は米国，ブラジル，アルゼンチン，中国など。

菜種油：菜種（油分40%）から圧搾・抽出法で得られる半乾性油。オレイン酸を60%含む。大豆油を抜いて生産量はわが国でNo.1。主産地は中国，カナダ，欧州，EUなど。

胡麻油：わが国でも古くから利用されている油で，リグナン類をはじめとした生理活性に優れた微量成分を含む。多くは焙煎して風味付けして使用される。主産地は中国，アメリカ諸国，ベトナムなど暑い地域が中心。

綿実油：綿花生産時の副産物である綿実を搾油して得られる半乾性油。リノール酸を50～60%含むが飽和脂肪酸も多く（20～30%）含み，安定性に優れる。綿実は綿花の副産物であり，綿花の生産国は中国，米国，ロシア，インドなど。

米油：米糠から抽出で得られる。原油の平均酸価は25前後と高く，精製歩留りが低い。オレイン酸（40～44%），パルミチン酸（16～17%）など植物油の中では比較的飽和酸，単価不飽和酸が多い。わが国唯一の国産植物油である。

ひまわり油：かつては大豆に次ぐ重要な油脂だったが今は4番目の生産量。比較的地域が偏っており欧州，ロシア，東欧，アルゼンチン，米国，トルコなどが主要な生産国。高リノール酸が特徴だが，最近では高オレイン酸タイプの生産量が増えている。

コーン油：トウモロコシの胚芽から得られる。風味が良く，サラダ油として高い評価を受けている。サラダ油にしても色が濃いのが特徴。リノール酸を50～60%含む。

サフラワー油：日本ではべに花油としての方が有名。世界的にはマイナーな油脂で，産地は米国（カリフォルニア州とアリゾナ州），オーストラリア，メキシコなど比較的限られている。焙煎する芳香油も多い。オレイン酸40～49%，リノール酸30～37%。

オリーブ油：地中海地方特有の油。オリーブのフルーツを搾油。精製しないバージン油が特徴。搾油法も独特で圧搾か遠心分離機が主流を占めている。オレイン酸80%。

パーム油：マレーシアとインドネシアが主産地。パームヤシの果房を搾油。単収高く競争力に優れる。半固型脂で安定性に富み，フライ油に最適。カロチンを多量に含む。工業用としても幅広く利用。パルミチン酸（39～46%）とオレイン酸（38～44%）が主成分。

ひまし油：水酸基をもったリシノール酸を多量に含有。他の植物油にはない特性を持つ。脱水ひまし油，ロート油，セバシン酸など工業用途として貴重。インドが主産地。

亜麻仁油：酸化しやすく不安定な油で，塗料やインクが主な用途。ロシア，アルゼンチン，カナダなどが主産地。リノレン酸を40～60%含み健食用途も増えている。

荏油：紫蘇から得られる油で，古くから灯明油として利用されてきた。最近ではn-3系の不飽和脂肪酸（ α -リノレン酸）を多く含むことから健食用で人気。

椿油：椿は日本固有の植物で，海外では山茶花になる。オリーブ油に似て，オレイン酸含有率が高い。頭髪用として古くから利用。

東京油問屋市場役員名簿

(平成12年2月24日現在)

役職	氏名	会社名
名誉会長	金田勝次	カネダ株式会社
顧問	大家萬次郎	株式会社大家商店
理事長	金田達明	カネダ株式会社
副理事長	館野浩一	株式会社タテノコーポレーション
	島田孝克	島商株式会社
	白石欣三郎	大阪屋株式会社
監事	穴水徳五郎	穴水株式会社
	穂保治男	山商株式会社
理事	鈴木公雄	株式会社三和油店
	山崎多一郎	合資会社池田屋商店
	森本信蔵	合名会社森本油店
	菅野今朝吉	株式会社三河屋油店
	大家重男	合資会社大家商店
	白鳥萬正司	白鳥商事株式会社
	遠藤寛治	株式会社遠藤慶吉商店
	酒井英彦	株式会社大鉦
	菱沼宏一	株式会社伊豆安商店
	浅井修	富田産業株式会社
	田原周一	田原香油株式会社
	宇田川公喜	株式会社宇田川商店
	野口浩	日清商事株式会社
	金子公洋	昭産商事株式会社
	大久保行雄	東京日華商事株式会社
	山本清一郎	株式会社総合食品山本

東京油問屋市場の歴代理事長と在任期間

歴代理事長	在任期間
1 岩出脩三	東京油問屋市場創設時の理事長
2 萩原利右衛門（初代）	大正時代
3 飯島録三郎（初代）	（昭和3年（?））～昭和14年2月
4 館野栄吉	昭和14年5月～昭和17年9月
5 萩原利右衛門（2代）	昭和17年9月～昭和20年8月
6 須賀英二郎	昭和21年3月～昭和23年3月
7 島田増次郎	昭和25年11月15日～昭和27年6月3日
8 飯島録三郎（2代）	昭和27年6月3日～昭和28年9月5日
9 大家重治	昭和29年5月25日～昭和33年6月20日
10 島田増次郎	昭和33年6月20日～昭和36年6月27日
11 館野栄一	昭和36年6月27日～昭和41年6月28日
12 河合誠一郎	昭和41年6月28日～昭和44年4月22日
13 金田勝次	昭和44年6月19日～昭和47年6月28日
14 白石長三郎	昭和47年6月28日～昭和53年6月28日
15 菱沼由三郎	昭和53年6月28日～昭和56年6月24日
16 岩佐長四郎	昭和56年6月24日～昭和59年6月27日
17 田原欣之助	昭和59年6月27日～平成2年6月29日
18 鈴木公雄	平成2年6月29日～平成4年6月24日
19 大家萬次郎	平成4年6月24日～平成6年6月24日
20 島田孝克	平成6年6月24日～平成8年6月20日
21 白石欣三郎	平成8年6月20日～平成10年6月24日
22 金田達明	平成10年6月24日～

注) 明治・大正時代の記録が関東大震災（大正12年）により失われたため、初代の岩出脩三と萩原利右衛門以外の理事長については全く不明。飯島録三郎（初代）については理事長就任年が不詳。昭和12年以降については油問屋市場の理事会記録（議事録）が残されているが、太平洋戦争により資料が散逸、消失したため昭和20年までは証する資料が極めて不完全、不正確。従って、理事長名の前の就任番号は仮数字。昭和14年3月13日の議事録に「歴代理事長肖像掲揚委員会合ス」として「歴代理事長中古キ者ハ大正大震災ニテ書類消失の為不明ナルヲ以テ今回ハ不取敢分明ナル岩出脩三、萩原利右衛門、飯島録三郎ノ三氏ノ写真を掲揚し、右ノ他ニ理事長ヲ勤め且之ヲ証明スルニ足ル書類呈出セラレタル者ハ其ノ都度之ヲ審査決定スルモノトス」との記述がある。

《資料提供》(50音順, 敬称略)

味の素(株)	住吉神社 (佃島)
大島椿(株)	撰津製油(株)
かどや製油(株)	竹本泰一
神奈川県立歴史博物館	竹本福三郎
木内武郷	谷山友彦
木村治愛	東京国立博物館
九鬼産業(株)	東京都江戸東京博物館
国立歴史民俗博物館	(株)油業報知新聞社
昭和シェル石油(株)	油祖離宮八幡宮
白石 孝	吉原製油(株)

◆口絵写真

岡本 央 (おかもと さなか)

日本写真家協会会員。現在フリー。「中国」「国境を越えた日本人」「農業」をテーマとするルポルタージュを発表。写真集『馬と遊び馬と走るモンゴル大草原』, 写真展『郷童見聞録』, 共著『シルクロード キジル大紀行』(日本放送出版協会) 等作品多数。

◆古文書翻訳

櫻片 真王 (おがた まお)

上智大学文学部国文学科卒。現在, 上智短期大学等講師。著書(共著)に, 『ふるさと大歳時記』(角川書店), 『新明解古語辞典』(三省堂), 『全訳読解古語辞典』(三省堂), 『江戸名所図会事典』(筑摩書房), 『必携古語辞典』(角川書店), 『日本古典文学大辞典』(明治書院) ほか多数。